

# 全ての教育活動を通して 子どもと社会を「つなぐ」という意識を

千葉大教育学部教授 藤川大祐

社会の変化が予測しにくい時代となり、子どもが自ら未来を切り開いていく力を育てる必要性が高まっている。そうした状況にあって、小学校でのキャリア教育はどのように進めるべきか。キャリア教育が重視される背景や具体的な実践方法について、千葉大の藤川大祐教授に話を聞いた。

## キャリア教育が重視される背景

“子どもが”今“なりたい職業は”  
“将来”存在しないかもしれない

文部科学省中央教育審議会の答申で、1999年に初めてキャリア教育の必要性が示されてから十数年が経ち、子どもが将来について考える取り組みが進められています。しかし、その間にも就労状況は大きく変化し、これまでのキャリア教育を踏襲するだけでは十分とはいえなくなっています。

例えば、ITによる業務の省力化や機械化が進展し、今や、「コンピュータや機械に出来ない仕事は何か」という問いを突き付けられています。子どもが今なりたいと思っている職業が未来にあるとは限らず、今は存在

しない職業に就く可能性が高いのです。

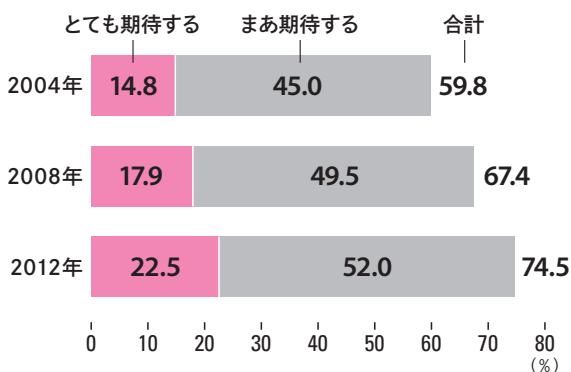
少子化の進行も、キャリア教育の必要性を高めています。選ばなければ誰でも大学に入れるという状況下では、選択肢が多い分、自分が何を学び、どこに進みたいのかをしっかりと判断する必要があります。

こうした社会の変化に対し、保護者も職業観や進路について、子どもにどのようなアドバイスをすれば良いのか分からず、学校に求めているのかもしれませんが（図1）。加えて、新たな学力観では、生活経験によるところが大きい総合的な学力が求められるようになり、教育格差が広がっているとも感じています。例えば、「国内外の旅行に連れていく」「博物館や美術館に連れていく」「保護者の職場を見せる」といったことは、保護者の経済的、

文化的な差により、子どもに経験格差が生じているのです。そのため、学校において豊か

図1 保護者の学校の教育や指導に対する期待

● 将来の進路や職業について考えさせる



出典／ベネッセ教育総合研究所、朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査 2012」

社会を生きる力を育む——地域、家庭とつくるキャリア教育



ふじかわ・だいすけ◎東京大  
大学院教育学研究科博士課程  
単位取得満期退学（教育学  
修士。専門は、教育方法学、  
授業実践開発。各教科やキャ  
リア教育、メディアリテラ  
シーなどの授業づくりや学級  
経営に関する研究を行う。N  
PO法人企業教育研究会理事  
長。近著に『授業づくりエン  
タテインメント！—メデイ  
アの手法を活かした15の冒  
険』（学事出版）など。

な体験がある程度、保障することが求められて  
います。

キャリア教育を必要としているのは、子ども  
だけでなくありません。人口減少が進み、地  
域によっては急速に過疎化が進んでいます。  
特に、小学校は地域の基盤ですから、地域の  
課題は学校の課題でもあります。これまでの  
ように「地域に何をしてもらうか」ではな  
く、「子ども（学校）が地域に何を出来るか」  
を考えるべき時期にきているといえるのでし  
ょう。子どもが自分と深い縁のある地域に貢献  
することは、社会貢献の第一歩です。そうし  
た体験は、子どもにとって貴重なキャリア教  
育となるに違いありません。

キャリア教育の目標

縁や出会いを大切に  
自分の強みを生かせる人材に

文部科学省は、キャリア教育で育成すべき  
力として「基礎的・汎用的能力」を示してい  
ます。いずれも大切な力ですが、広義の解釈  
が出来るので、取り組みに具体的に生かすた  
めには各地域・各校の工夫が必要です。私は、  
これらに加えて、自分の強みを生かし、守り  
より「攻め」の姿勢を持つことを強調してい  
ます。IT化やグローバル化といった変化の  
早い社会に求められるイノベーションは、計  
画通りに進めるとか、自身に適性があるとか  
ということに縛られず、周囲と違うことを考

えられる人から生み出されるからです。そう  
したことを踏まえ、キャリア教育の目標を次  
のように整理しました（P.6図2）。

●ルールやマナー

あいさつをしたり、電話を掛けたり、失敗  
したら謝ったり、締め切りを守ったりといっ  
た社会的なルールやマナーが身に付いていな  
いと、何事も円滑に進められません。形式と  
して身に付いていれば良いことも多いので、  
社会の基本として教えるでしょう。

●取材能力

変化の激しいこれからの社会では、次々に  
分からないことが生じますから、人から知識  
を得る力がないと、社会に参加するのは困難  
です。キャリア教育の基礎として、特に力を  
入れて育みたい力です。

●協力獲得能力

ほとんどの仕事は協同作業が進められ、自  
分1人で出来ることには限りがあります。自  
分がしたいことを成し遂げるために、人の協  
力を得る必要があります。

●プロジェクト遂行能力

仕事を進めるためには、互いの違いを生か  
し、チームワークを発揮することが大切です。  
小学校でも、弱みを補い合い、個々の強みを  
発揮できる場面づくりは、更に力を入れる必  
要があるでしょう。

●社会貢献意識

仕事とは本質的に誰かのためにするもの、

図2 キャリア教育の目標

社会に参加する基礎	ルールやマナー	挨拶すること、約束を守ること、相手の時間を尊重すること等、社会人としてのルールやマナーの基礎を身に付けていること
	取材能力	かかわりがなかった人のところに出掛けていき、その人の仕事や生き方について取材が出来る能力
協力に関する能力	協力獲得能力	自分が実現したいことのために、多くの人々の協力を得る能力
	プロジェクト遂行能力	互いの違いを生かし、チームで協力して活動する能力
かけがえない自分	社会貢献意識	社会から受けた「恩」に報いることを目指し、社会に貢献できる「利他的な夢」を描こうとする態度を身につけていること
	自己肯定感	他者とは違う自分のよさを理解し、「一人でも世界を(少しは)変えられる」という感覚を持つ
戦略的な生き方	縁や出会いの尊重	遭遇した状況に応じて柔軟に計画を修正し、状況の変化を積極的に生かそうとする態度
	提案説明能力	さまざまな制約の中で実現可能な計画を提案し、周囲の人の理解を得られるよう説明できる能力

出典/藤川大祐、NPO法人企業教育研究会『企業とつくるキャリア教育』(教育同人社)

ので、こだわりすぎないことも大切だ。『好き』や『正義』を求めて立ち往生するのではなく、「この地域に住んでいるから」「社長が魅力のある人だから」など、縁や出会いを大切に、「当面はこれを頑張ろう」と前に進んでいけることも大切な力です。誰にも負けないという圧倒的な強みがある

す。そうした経験があると、大人になっても「誰かの役に立ちたい」という思いを持つようになります。「自分のため」の努力は妥協につながりやすいのですが、「誰かのため」の努力は継続させやすいものです。「人のために」という利他的な行いは、一見、自分を犠牲にするように感じるかもしれませんが、私は逆だと思っています。自分のことしか考えられない人を、誰が応援してくれるでしょう。利他的な方が、周囲からの助けを得て、巡り巡って得ることが多いはず。キャリア教育では、利他的な意識も育ててほしいと考えています。

キャリア教育の授業のポイント

全ての教育活動は子どもの未来につながっている

キャリア教育の実践法についてお話しします。前提として、キャリア教育は「将来につながる」という意味で、全ての教育活動を通して行うべきものです。これは道徳が道徳の授業だけではなく、全ての教育活動と関連しているのと同じことです。

教科学習も例外ではありません。例えば、社会科は、社会が発展してきた歴史をたどることで現在の状況を理解し、将来に向けてどのような意思決定をすべきかを学ぶ教科です。しかし、ともすると、出来事や年号を

つまり「利他的」なものです。「人のためになることをしたい」、言い換えれば、「社会貢献をしたい」という意識を育てましょう。

●自己肯定感

自分の良さを適切に理解し、他人と比べなくとも、「自分はやれば出来る」という自己肯定感を持つことは、生きていく上での心の支えとなります。

●縁や出会いの尊重

近頃、「好きなことを仕事にしないと」という強迫観念のようなものがあるように思います。しかし、例えば、サッカー選手になる人は限られますし、その時点で知っている職業にしかつながらないという難しさもある

くても、「そこそこ得意」という2つ、3つの強みを組み合わせることで自分らしい力が発揮できていくものです。

●提案説明能力

仕事では、上司や客などの他者に提案や説明をする場面の連続です。進路選択では、保護者を説得することが必要になるかもしれません。自分がやりたいと考えていることを、諦めずに提案・説明する力を育てましょう。

地域の人々に喜ばれる経験が利他的な意識を育てる

キャリア教育では、地域の人たちに認められたり喜んでもらったりする経験も大切に

## 社会を生きる力を育む——地域、家庭とつくるキャリア教育

覚える暗記教科になってしまっただけではないでしようか。

もちろん教科や活動によって濃淡はありますが、基本的には全ての教育活動は将来につながっている。そのことを踏まえて、「直接的なキャリア教育」と「間接的なキャリア教育」に区別すると、分かりやすいと思います。 「直接的なキャリア教育」は、自分の将来について考えたり、職業について調べたり、地域社会で体験活動をしたりする学習活動で、既に多くの学校で取り組んでいることでしよう。それも大事なのですが、小学校段階では、むしろ「間接的なキャリア教育」を重視してほしいと考えています。

「間接的なキャリア教育」を進めやすいのが、係活動や委員会活動です。こうした活動に積極的に取り組まない子どももいますが、それは、きちんとやっても褒められないのに、さぼったり失敗したりすると叱られるという「報われない活動」だからではないでしょうか。係活動や委員会活動をキャリア教育と捉え直し、各人の仕事に感謝を伝え合う時間を設けるなどすれば、責任感が芽生え、もっと改善しようという気持ちが生まれるでしょう。実際に社会に出れば「報われない仕事」と感じる場面もありますが、そうした社会の課題に目を向ける機会にもなるはずですよ。

多様な大人に会う体験をさせることも、大切なキャリア教育です。教師と保護者以外の

大人と緊張感を持ってコミュニケーションを図ることで、子どもの世界は広がります。

お勧めは、大人に主観的に人生の良い時期や悪い時期を波線グラフにかいてもらい、話してもらうことです。子どもは、夢という将来の目標に向かって真っ直ぐに向かうようなイメージを持ちます。しかし実際には、人生にはいろいろあり、失敗しても立ち上がり、やるべきことを見付けて進んでいくことを、多様な大人を通して見せてあげてください。

教科学習でも「間接的なキャリア教育」が主となるでしょう。例えば、国語科でインタビューをする学習では、地域の人を招いて人生観や職業観を掘り下げて聞くようにすれば、効果的なキャリア教育となります。全ての単元では無理ですので、社会とつながりやすい単元をうまくキャリア教育に関連付けていくとよいでしょう。

## 先生方への期待

先生自身が社会に目を向け  
子どもに新しい情報を発信する

先生自身が社会の動きに目を向けることも不可欠です。多忙だとは思いますが、読書やインターネットで情報を得たり、年数回でよいので校外の研修会や講演会に参加したりする時間をつくってください。あたかも呼吸するかのようには外界から新しい情報を吸収し、

固定観念などを捨てていくイメージです。外部の空気を取り入れて、先生自身が自然とこれからの社会を示していきたいでしょう。

先生が1人で背負い込みすぎないことも大切です。これだけ急速に社会が変化しているのですから、1人で全てを教えることは難しいでしょう。必要に応じて地域や保護者の力を借りれば、先生の負担は大きく軽減されま

すし、教育効果も高まるでしょう。

また、企業やNPO法人と連携することで、キャリア教育に厚みが生じます。外部の教材やプログラムは、先生自身も学ぶ機会になるでしょう。今は広域の出前授業に協力してくれる企業が増えていきます。文部科学省のウェブサイト「子どもと社会の架け橋となるポータルサイト」(\*)では、社会貢献の観点から学校への支援を提案する企業と、支援を求めている学校をマッチングしています。

そして、子どもにとって、社会を垣間見ることが出来る最も身近な大人の1人が、先生であることも忘れないでください。先生が未来の社会をつくるために貢献しているというような前向きな姿勢を持てば、子どもは大切なことを感じ取ってくれるでしょう。授業でも、先生ならではの情報を伝え、社会とのつながりを意識させることも立派なキャリア教育です。その日、その時間、その子たちに向けて伝えたい一言があるか。そのような観点で授業を考えていただければと思います。

\*子どもと社会の架け橋となるポータルサイト <http://kakehashi.mext.go.jp>